

キリスト教福祉の道標

田 浦 武 雄

I キリスト教福祉のフロンティア

(1) ハンナ・リデルと宮崎松記

私がキリスト教福祉の原点を考える場合、想いおこすのは、旧制第五高等学校（現在の熊本大学、以下五高と略称）の在学中、菊池恵楓園での宮崎松記（1901～1972）博士との出会いの経験である。ある夏の一夜、五高のYMCA（花陵会）のメンバーの何人かと一緒に、当時、熊本市郊外にあった菊池恵楓園の園長で花陵会の先輩でもあった宮崎松記博士家に招かれたことがある。この恵楓園はハンセン病患者を収容し治療にあたっていた病院である。この訪問は太平洋戦争が始まって3年目（1944年）位のころであった。細かいことは記憶に残っていないが、その時、宮崎博士が、「人は何かをなすために生きているのだ」と述べられたことばが、印象ぶかく残っている。このことばには、同氏の深い体験がこめられていると思って、感動を覚えた記憶がある。宮崎博士の生涯は、文字どおり、キリスト教信仰に根ざしたものであったと思う。この信仰を与えたものは、青年時代におけるハンナ・リデル（Hannah Riddell 1855～1932）女史との出会いであった。

私は最近になって、かねて探し求めていた宮崎氏の著書『ほだい樹の木陰で－インド救ライの道』（講談社、昭和44年）を読む機会を得た。同氏はその著書の中で、リデル女史との出会いについて、次のように述べている。

「学校（五高）の道ひとつ隔てた東側にライ病院があり、“もみじ山”という丘に登ると、一望のもとにそれが見わたされた。まず目に映ったのはみにくい患者に混じった、きれいな高貴な外国婦人の姿であった。多感な青年時代の私が、この情景を見て、強い印象を受けないはずはなかった。これは回春病院といって、英国婦人ハンナ・リデル女史の経営するライ病院であった。」¹⁾

このように宮崎博士は、リデル女史との出会いを述べている。リデル女史に、ハンセン病の病院建設を思いつかせたきっかけは何であったろうか。それについて宮崎博士は次のように述べている。重要な出来事は1890（明治23）年4月3日におこった。

「熊本本妙寺の参道両わきの爛漫として咲きほこる桜並み木の下に、うづくまる多数のライ患者を見て、五高教師だったリデル女史は日本の救ライを決意したのだという。回春病院ができたのは明治 28 年（1895 年）のことになる。」²⁾

リデル女史は、1889 年 34 歳の時、英国のキリスト教伝道団体（CMS）から日本に派遣された。最初は大阪に行き、プール（Poole）女学校で 3 ヶ月勤めたあと、翌 1890 年熊本に赴き、旧制の第五高等学校の教師として英会話を教えていた。当時の五高の校長は嘉納治五郎であり、講道館柔道の創設者ともなった。

リデル女史にとっては、本妙寺の美しい桜との出会いよりも、ハンセン病患者たちとの出会いが、かの女の一生の転換をもたらした。かの女と患者の中の一人との出会いについて、岩下莊一氏（御殿場の神山復生病院長）は、「リデル女史の思出」で、次のように述べている。

「資財を費いつくして途方にくれ、まさに自殺を決意して翌日実行しようとしていた身分も教養もある人——英語をもって彼女に答えた——との出会いが、女史の生涯に一転機を画した。」³⁾

ハンセン病は、当時、不治、遺伝病との偏見が根強く、いったんこの病にかかった人は、家を追われ放浪し、神社や寺の門前で、物ごいをする者が多かった。

リデル女史は、これらハンセン病患者との出会いを神の啓示とうけとり、自分のなすべきことは、何よりもこれらの人々の救済にあると考え、日本人たちの関心がそれほど高くない時に、自らの一生を献げて、ハンセン病患者の救済の必要を思いたち、病院の設立を万難を排して実現することへ向って、全力を注ぐのである。

これより先、ノルウェーの医師ハンセン（A. G. H. Hansen 1841～1912）によって、1873（明治 6）年ライ菌が発見され、ライ病は後にはハンセン病と呼ばれるようになったが、日本では、1907（明治 40）年のライ予防法の制定後も、ライという言葉が使われていた。

(2) リデルの信仰と活動

リデル女史が異国における伝道にたちむかうには、大きな勇気と決断を要したと思われるが、さらにハンセン病の救済を決意するにいたったことは、誠に大いなる決断であったと思われる。リデル女史のハンセン病救済への献身は、日本におけるハンセン病患者救済のあけぼのであったとともに、日本の社会福祉の開拓の原点でもあった。リデル女史によって、キリスト教福祉のフロンティアが示されたといってもよい。このフロンティアは、リデル女史という聖公会の一伝道者によってきりひらかれたことに注目したい。

病院を建設し、維持し、発展させていくには、多くの資金を必要とした。日本政府や県

市の助成金は、当時皆無であったので、英米の有志の寄付に頼っていた。1894年秋、五高の東、竜田山ふもとの監獄跡地4千坪を買収して、病院建設にとりかかり、翌年11月に開院する運びとなった。回春病院と名づけられたのは、暗黒の人生に再び希望の春を回り来たらせることを念じたためといわれている。

1905（明治38）年、日露戦争で日本が勝つと、日本に対する評価が変わり、日本へ援助する必要なしと考えたことで、英国からの寄付が止まり、リデル女史は、やむなく大隈重信伯爵等に援助を乞うた。当時日本のハンセン病患者は3万人以上と言われた。大隈重信、渋沢栄一、光田健輔氏らの協力がみのり、1907（明治40）年ライ予防法が制定され、国公立の療養所の設立が始まった。リデル女史は回春病院の充実をはかるとともに、ハンセン病研究所を設立し、研究者の養成にも努めたことは、先見の明があったとすることができる。

(3) リデルからライトへ

リデル女史は、1932（昭和7）年78歳で逝去し、後継者に姪のライト女史（Ada Hannah Wright 1870～1950）がなった。ライト女史は1896（明治29）年にリデル女史を助けるために来日し、回春病院で働き、すでに36年間がたっていた。ライト女史も献身的にこの病院を支えてきたが、1941（昭和16）年4月、国際情勢の悪化とともに、この病院の閉鎖が当局によって命令され、患者は、国立恵楓園へ移され、71歳になったかの女は国外退去を余儀なくされ、オーストラリアに移った。太平洋戦争終了後、1948（昭和23）年6月に再び来日し、回春病院跡の家屋に住居し、患者たちとの交流に努めた。1950（昭和25）年2月、宮崎博士にみとられながら、80歳の生涯を閉じた。日本の病者のそばで死にたいというのが、かねてからの願望であった。翌年には、リデルとライトの二人を記念する老人ホームが設立されて、現在にいたっている。

リデル女史さらにはライト女史の業績は日本における社会福祉の原点、すくなくとも重要な一つの原点として、評価できるものである。

II 宮崎松記の信仰と活動

(1) 国内における活動

ハンセン病患者救済の精神をリデル女史から、医療の面でうけとめたのが、宮崎松記氏である。同氏が、旧制五高在学中における、リデル女史との出会いが、同氏の生涯を方向づけることになった。

リデル女史とともに、宮崎氏の心を動かしたものに、ダミエン神父の活動がある。宮崎

氏が五高時代毎日曜日に通っていた教会の礼拝説教で、米国から帰った牧師が、ダミエン神父の話をした。ハワイのハンセン病隔離のための孤島モロカイに渡り、患者と寝食をともにして、世話をしているうち、自らも感染したが、伝道に励み、この島で死去した。神父の死が伝わると、米国は駆逐船を派遣して、遺体をはこび、母国ベルギーでは、国葬の礼をもって迎えたという。

宮崎氏はハンセン病治療が尊い仕事であることを感じ、リデル女史の献身の姿やダミエン神父の話を知って、ハンセン病治療の医師になるように人生の方向が決定されたのである。同氏がその決心をうち明けたとき、養父母をはじめ、親戚からもむしろ祝福されたという。本人の決断も偉大だが、家族の人々の態度も立派なものだと感ぜられる。

1920（大正9）年、宮崎氏は旧制五高を終えて、京都大学医学部へ入学した。在学中には文科系の講義にも出席した。特に経済学部の河上肇、文学部の哲学の西田幾多郎の両教授の講義をも聴講した。また在学中はキリスト教青年会に属し、寄宿舍生活をし、他学部の学生との議論に花を咲かせた。同氏の人間性は、この間に形成されたようである。哲学の無い医者、人間という機械の修繕工にすぎないとして、視野を広く深くすることを心がけた。

医学部では外科の教授の魅力に引かれて、宮崎氏は外科を選ぶことになり、卒業後大阪赤十字病院で勤めた後、頼まれて熊本の九州療養所長となった。時に34歳。1934（昭和9）年のことである。

この九州療養所は九州各県連立のハンセン病の病院で、後に国に移管され、国立療養所菊池恵楓園と呼ばれるようになった。熊本、鹿児島、宮崎の三県には当時ハンセン病患者が多かった。最初1000名、ついで500名、計1500名の増員計画をたてた。当初から学閥人事の問題や土地取得の問題など、難関にぶつかったが、強力な意志をもって、各種の抵抗を排除して、病院の拡充に努めた。

なおこの間、教育の機会均等の立場から、ハンセン病患者の子ども特にハンセン病に感染していない健常児を一般普通の学校に通学させるように主張したが、ハンセン病に対する偏見をもった地域住民に受け入れられず、全国的な社会問題となって、国会にまでもちこまれたことがある。

宮崎氏は24年間にわたって、医療に献身的奉仕を続けたが、療養所の事務長の進退問題をきっかけに、1958（昭和33）年9月に院長を辞職することになった。しかしやめたとたん、東南アジアの医療活動に行くことを要請された。

ハンセン病患者は、1941年に特効薬プロミン等の発明もあって、日本では激減し、宮崎氏の活動は日本での責任を終え、国内から国外へと向けられることになった。ハンセン病がわが国で激減したのは、国の努力もあったが、リデル、ライト両氏をはじめ外国人の

献身的な善意と努力のおかげでもあった。かれらの恩に報いなければならないし、また日本は戦争でアジアの人びとを苦しめた。そのお返しをせねばならないというのが、宮崎氏の信念であった。これは同氏の優れた見識であったとともに、隣人愛の信仰のふかさを知ることができる。

(2) 国際的活動

宮崎氏が、国際的医療活動の場として選んだのはインドであった。そのきっかけは、ネール首相（J. Nehru 1889～1964）の依頼によると言われている。インドにおけるハンセン病患者は320万人といわれ、日本と比べ、けた違いに多かった。すでに英、米、デンマーク等の医療チームによるハンセン病医療は、インドで始められていたが、患者の数が多く、手つかずの地域が多かった。

宮崎氏は、1959年にインドのハンセン病の実態と、どこに病院を建てて治療したらよいかを調べ、インド政府に12項目の勧告をだしたところ、ネール首相は、日本の協力を依頼した。1961年5月に再びインドを訪れ、病院建設の計画をたて、帰国して、建設資金を集めることになった。奔走の結果、政財界の協力をも得て、1962年5月に「アジア救ライ協会」（JALMA—Japan Leprosy Mission for Asia）の設立の運びとなった。

JALMAによる病院建設について、インド政府と協定を結ぶさい、宮崎氏を含む代表団に対して、ネール首相は次のように述べた。「JALMAの原動力となった日本国民の博愛の精神に敬意を表し、感謝する。なお、この活動の最初の場として、インドが選ばれたことを喜ぶ。」と。建設地として最後に選ばれたのはアグラであった。アグラは、ニューデリーから東南200キロ、人口50万のインドの古都で、総合大学もあった。タジマホール⁴⁾という有名な建物のあるところから、2キロのところであり、後にハンセン病院の建設が、タジマホールの観光を妨げはしないかという反対運動もあがったところである。しかしネール首相の決断で、予定どおりこの地に病院は建てられることになり、礎石は1963年12月15日ネール首相の手でおかれた。その碑面には、次の文句が刻まれている。

「アジア救ライ協会インド・センターは、日本国民のインド国民にたいする、善意と友愛の精神によって建設された」と。

折しも中印戦争の渦中にあり、健康がすぐれないにもかかわらず、ネール首相は定礎式に出席したが、翌64年5月逝去した。この定礎式がかれの75年の生涯における最後の公的行事となった。

しかし当時の教育大臣がJALMA建設地にクレームをつけ、工事が停滞したが、結局教育大臣も折れ、起工式は1964年9月になっておこなわれた。定礎式から、10ヵ月位経ったころであった。この後も建設場所について妨害が入ったり、悪徳業者の介入で工事がお

くれたが、医師 2、薬剤師 1、看護婦 4、技師 1、ケースワーカー 1、病院ハウスキーパー 1 計 10 名の陣容でスタートすることになった。

しかしひどい熱さ、多くの患者の治療で、スタッフのつかれと苦労は計り知れなかったが、治療に献身し、人々の信頼をかちえていった。当時の日本では、医道の退廃が叫ばれていたかもしれないが、ハンセン病者の治療に対する新しい使命感に燃え、感激をもってインドに活動の場が与えられた医師、看護婦の心の底には、しっかりした医療に対する倫理感が芽ばえていたといえる。

宮崎氏のインドのハンセン病治療の記録は、『ぼだい樹の木陰で』という本にまとめられている。その扉の頁に、「外国の病める人々に対する善意と友愛の精神に感謝し、謹んでこの書を日本国民のみなさんに捧げる」とある。菩提樹は、釈尊が、その下で、悟りをひらいたことで有名である。宮崎氏が働いたセンターの構内にも、何百年かの樹齢をはこる菩提樹があった。その菩提樹のサラサラとひびく葉ずれの音は、印象的であったようであり、宮崎氏はそこではたえず、シューベルトの菩提樹（リンデンバウム）の曲をもおもいおこし、心のやすらぎを感じたようである。

(3) 『ぼだい樹の木陰で』が教えるもの

宮崎氏の『ぼだい樹の木陰で』の中から、キリスト教信仰と福祉、人間形成に関連して注目すべき主張を、若干とりあげてみよう。

「今後、日本が先進諸国なみに、未開発国にたいし、文化的活動をおこなうとすれば、子供の教育上の心配がないようにしてやるのが、絶対必要な条件である。そうでないと、若い優秀な人材に、海外進出を望むことが困難になる。」(155 頁)。

この主張は海外子女教育の体制づくりの重要性を指摘したものといえる。

「金や物もさることながら、事業の成否は、人にある。外国に進出することは、その人が日本を代表することになる。よきにつけ、あきしにつけ、現地の人々は、この少数の日本人の一挙一動によって、日本にたいする概念をつくりあげることになるのだ。」(156 頁)

宮崎氏のこの警告は、海外での企業活動の場合だけでなく、学生の教育実習や保育実習の場合にも、あてはまるように思われる。当該の学生は、大学の代表としてみられ、大学の評価のきっかけとなっている。

「親子二代、あるいは三代にわたって、インドといわず、未開の奥地で文化活動に身を挺している外国人の姿は、けっしてまれではない。」(158 頁)

この主張は、性急に成果をあげるのを期待することなく、ねばりづよく落ち着いて仕事に専念し、有終の美を飾ることの大切さを教えてくれる。

「ライ・スラムの住人たちは、いつも空腹をかかえ、…これ以下の人間生活は想像できない。…しかしかれらは朗らかで、深刻な顔をしているのを見たことがない。

王侯貴族の住みそうな大きな家で、多数の召使いにかしずかれ、手当てのよく行きとどいた広い庭をながめ、身には最高級の衣服をまとった人々との交わりで、私はライ・スラムの諸君の顔に見るようなあたたかい心の通いを感じたことがない。」(176頁)

これは人間のあたたかみとは何か、幸福とは何かを深く考えさせられることばである。

「“理想の人間像” というような抽象的な語でなく、たとえば私どもの“インド救ライ” というような、一つの具体的な目標を示せば、このことから、人類連帯、国際協力、国際親善、世界平和、隣人愛、人類愛などの雄大な徳目がおのずと理解されることになる。日本の若い世代が、こんなことに感激をおぼえ、自覚することになれば、青年たちがしっかりと立ち上がることはまちがいないし、またそうあらねばならない。私は、日本の若い世代に希望を託し、将来の外国への文化協力の計画には、明るい希望をもっている。要は教育であり、政治である。」(187頁)

同氏はこのように、いわゆる非行少年問題でいたずらに心配しているより、よい目標さえ与えれば、日本の若い世代は立ち上がるのだと述べ、人生の行動における目標を与えることの重要性と青年への期待と信頼をよせている。

「進歩したライ対策を実施してきた国々では、いち早く、保育所をつくって、療養所に入った親から分離して、その子供を育ててきた。…一般児童の保育施設が発達した社会で、いつでも子供を受け入れてもらえる場合は、特殊なライだけの保育所は解消して子供たちを一般児童施設にとけこませて、ふつうの子供たちと同じ環境で成長させてやりたい。そして生涯にわたるライという“極印”の不幸から解放してやるのが望ましい。」(195～196頁)

以上は宮崎氏の『ぼだい樹の木陰で』からの引用であった。次に医療の姿勢について語った不滅のことばがあることに注目したい。

「医療の姿勢で大切なことは、治療してやるのではなく、治療をやらせてもらっているという態度である。」(NHKラジオ第一放送。1972年5月18日)

宮崎氏はこのように簡潔ではあるが、キリスト者の医療の基本姿勢を示したことは、誠に意義深い。この姿勢は、キリスト教医療だけでなく、キリスト教福祉の基本姿勢でもあると考える。

インドではハンセン病は減少しつつあるが、アグラの救ライセンターは、1972年6月15日インドでの日航機墜落事故で宮崎博士が死去したあとも、斉藤俊医師らによってうけつがれたが、1976年夏には、このセンターはインド政府にひきわたされ、運営されて今日にいたっている。

青年時代における、リデル女史の出会いの体験は、日本のハンセン病患者の救済へと向うキリスト教福祉の生きた原点を提示した。もしもリデル女史がハンセン病患者と出会うことがなかったら、キリスト教福祉の歴史も変わったものになったであろう。また宮崎青年がリデル女史に出会うことがなかったら、果してハンセン病治療が進展していったか疑問である。またネール首相から宮崎博士にインドのハンセン病治療の依頼がなかったら、インドと日本との新しい医療をとおしての国際交流はなかったであろう。一見ちょっとした機会やチャンスが、人々の生涯を大きく変えていったのである。⁵⁾

Ⅲ キリスト教福祉の精神的基礎

(1) 出会いの重要性

キリスト教福祉のフロンティアが、リデル女史によって英国から日本に開かれ、日本の国内におけるハンセン病医療が宮崎氏らによって推進され、さらに宮崎氏によって日本からインドへと福祉のフロンティアが開かれていった。

これらの福祉活動を支えたものはキリスト教信仰といえるが、哲学的なキーワードを使えば、“出会い (Begegnung, encounter)” の重要性を教えられる。

出会いということばが、思想的に有名になったのは、イスラエルの哲学者マルチン・ブーバー (Martin Buber, 1878~1965) の 1923 年の著書『我と汝』(Ich und Du) によってであった。ブーバーは、我と汝との人格的呼応関係を重視した。これこそ実存的な出会いに導いてくれる。その時始めて他者を人格として対処できる。現実の人間関係の状況は、他者を自己の要求の手段視し、我とその関係に陥りがちである。我と汝の人格関係を支えるものは、我と永遠の汝である神との対話的広答関係である。この点で、人間の普遍的理性を強調する人間中心のヘレニズムの流れや、近代の観念論のもつ人間観とはちがっている。

「我と汝」の人格的関係性を教育に移しかえるとどうなるだろうか。教育者は被教育者がその最上の可能性を自ら実現するように援助するために、かれを可能性と現実性とおける特定の人格として考えなければならない。このことは教育者が被教育者に「我と汝」の関係の相手として出会うときにのみ可能となる。ブーバーの立場は、従来の伝統的教育やいわゆる新教育とちがう第三の立場を示している。伝統的権威を重視する教育も、子どもの自由を標榜する新教育も、教育の半面をみているのであって、子どもを全体的に把握してはいない。旧い教育は学習者の自由と自発性を十分に理解していないと同様に、新教育もまた自由を正しく理解せず放任に傾きやすい。真の自由とは「出会い」への自由である。これをかれは人格教育とよび、教師と生徒との人格的ふれあいを重視した考え方を主

張したのである。⁶⁾

神学的には、ブーバー以上に、「出会い」を重視したのは、スイスの神学者エミール・ブルンナー (Emile Brunner, 1889~1966) であったといえる。かれは1938年『出会いとしての真理』(Wahrheit als Begegnung) を著わし、信仰的実存を重視し、信仰における主体的自覚を強調した。これに対し、神学界の巨星の一人であったカール・バルト (Karl Barth, 1885~1968) は、信仰は神の恩寵であることを重視し、人間の側の主体性を強調する意味での出会いを重要な概念とは考えなかった。もっともかれは神との出会いを軽視したわけではなく、出会いの質が問題であると考えたのである。⁷⁾

聖書そのものに、Begegnung や encounter に相当する語があるか、私には明らかでないが、出会いとみられる実存的経験（現実の不確かさ、欠陥をのりこえて、高い存在を志向する経験）は、聖書のいたるところにみられる。たとえば、漁夫であったペテロが仕事をなげうってキリストへ従ったできごと、パウロのダマスコ途上における回心の経験などはその典型である。

かれらのたどった回心という精神革命は、キリストというよき師に恵まれ導かれなかったら、達成できなかつたであろう。とくにパウロは、キリストの直接の弟子ではなく、キリストの精神にふれた人物の場合における精神革命の典型といえる。これら二人の場合の例に示されるように、出会いは、人間が意図的に誰かと出会うという計画された行為ではなく、むしろ偶然に訪れるものである。しかし偶然に会っても、それによって精神革命がおこらなければ、出会いとはいえない。

しかしさらに問題は精神革命の質であり、出会いの質である。たとえば、Aという人物にBという人物が出会い、Aは世界観の変革を経験したが、Bという人物は、実は民族弾圧の革命を夢みたり、人を殺しても自己の野望を達成せんとするような場合、それは不幸な反社会的な出会いであって、真の出会いとはいえない。

学生時代に、良き師との出会いを経験したものは、なによりも幸いである。たとえば、札幌農学校（こんにちの北海道大学の前身）におけるクラーク博士と内村鑑三、新渡戸稲造との出会いは、その好例であろう。学校の教師たるものも、優れた出会いのうけてとなるように研鑽をつまなければならない。

聖公会の偉大な伝道者ハンナ・リデルが常に抱いた“神のための働き”に献身すること、そのための準備をすることが、いかに大切であるかを教えられる。それとともに、多くの聖句がキリスト教福祉の心を示しているが、そのうちの2つを掲げてみよう。

「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」(マタイによる福音書 25 章 40 節)。

この聖句は、キリスト教福祉の心を示したものであり、リデル、ライト、宮崎松記氏ら

の働きは、それぞれの生涯を通して、キリスト教福祉の心を示してくれた道標でもあった。

ヨハネ福音書 13 章 3～7 節にあるように、イエスが弟子の足を洗う実践の底にある精神も、キリスト教福祉の基礎になるものである。

「イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。」

人の足を洗うということは、当時は奴隷の仕事とされていた。イエスはあえて弟子の足を洗われた。しかもやがて神のもとに帰る、十字架と復活の途上で、このことがなされたことに、その重大な意味をよみとることができる。この信仰に基礎づけられた奉仕のわざこそ、キリスト教福祉の根底にあることを教えられる。

—注—

- (1) 宮崎松記著『ぼだい樹の木陰で——インド救ライへの道』(講談社、昭和 44 年) 21～23 頁。
ライ病は現在はハンセン病という語が使われているが、引用文ではそのままにした。
- (2) 前掲書、23 頁。
- (3) 岩下荘一「リデル女史の思出」、内田守編『ユカリの実るを待ちて——リデルとライトの生涯』(新教出版社、1976 年) 所収。118 頁。
- (4) タジマホールは、300 余年前に、当時の王が妃の死を悼んで建てた廟墓で、多くの大理石が使われ、22 年の歳月をかけて造られた建物で、観光客が絶えることがなかったとされている。
- (5) 1955 年の口語訳聖書では、ライ病は、旧約聖書レビ記 13 章 14 章にでていいる。(例 3 章 8 節、同 9 節など。) 新共同訳では、ライ病とせず、重い皮膚病と改められている。しかし新共同訳でも、新約聖書ではライ病という語が用いられている。(例、マタイによる福音書 8 : 1、マルコによる福音書 1 : 40、ルカによる福音書 4 : 27、17 : 12～14)。ハンセン病でいうライと、旧・新約聖書ででてくるライとは病気の種類がちがっているので、混同しない方がよい。ハンセンによるライ菌の発見以後、とくに今日では、ライ病よりもハンセン病を用い、この語に統一した方がよいのではないかと思われる。
- (6) 現代社会の人間関係は、ブーバーが言うように、「我と汝」や「我とそれ」という二つの類型に整理できないのではないか。「我と彼」、「我と彼ら」という関係も、無視することはできない。自己の行為が社会的関わりや、社会的影響力をまして来るにつれ、「我と彼」、「我と彼ら」の価値的中立関係が、「我と汝」、「我と汝ら」となりうるかどうか、隣人愛のひろがりや問題となってくる。例えば、科学者が原子力を発見したことそのものは、「彼」や「彼ら」とは関係ないかもしれない。しかし原子力が爆弾に使われるか平和産業に使われるかで、「彼」や「彼ら」との関わりが生じてくる。「彼」を「汝」として、人格的価値的存在とするかどうかの岐路があり、実存的教育の問題はここにもある。今や人間教育が、人類共生の教育となりうるかどうかの課題に直面している。
- (7) カール・バルト著 井上良雄訳『教義学要綱』新教出版社、1952。